よみがえれ！有明海・国会通信

2015年（平成27年）9月24日（木曜日）　第201号

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
（後藤富和）発行
092-512-1636
090-9602-0700

“有明海異変”　今なお拡大！～今季の被害～

タイラギ3期連続の休漁

【西日本新聞2014年11月8日】

タイラギ　3季連続休漁か　有明海で県が調査　成貝確認3個のみ

県有明水産振興センター（小城市）は７日、有明海湾奥部で実施した高級二枚貝タイラギの生息状況を公表した。漁獲対象の成貝（体長１５センチ以上）を確認できたのは、調査地点５５カ所のうち１カ所３個にとどまった。成貝が２個しか見つからず休漁した昨冬と同様の状況で、今季も出漁は厳しく３季連続の休漁の可能性が高まった。

調査は１０月の６日間に、５５地点（各１００平方メートル）で実施し、鹿島市沖約８キロの１地点で３個の成貝を採取。センターは、昨年時点で稚貝数が少なく、十分な量が育たなかったことが原因とみている。

タイラギ漁師でつくる県潜水器業者会の竹島好道会長（７１）は、センターから結果報告を受け「今季はタイラギが取れる見込みはないだろう。他の漁業についても水揚げ量が落ち込む中、この冬は漁師にとって氷河期になる」と肩を落とした。

赤潮発生！養殖ノリも色落ち

【NHK佐賀2015年1月4日】

佐賀県沖の有明海で行われているのりの養殖は、今シーズン、赤潮や病気の影響で生産量がやや減っていますが、新たに有明海北西部の鹿島市や太良町の沖合でも、先月末から赤潮が発生して、のりが十分に育たない「色落ち」の被害が確認され、漁業者の間からは、影響が広がらないか心配する声が出ています。佐賀県有明海漁協などによりますと、海水中のプランクトンが異常に増殖する赤潮が発生しているのは、有明海北西部の鹿島市と太良町の沖合で、先月末から確認されています。

赤潮の発生に伴って、海水中の栄養分が少なくなり、２日の調査では、養殖に最も適した量の２０分の１以下にとどまり、のりが十分に育たず色づきが悪い「色落ち」の被害も確認されているということです。佐賀県沖の有明海では、養殖用ののり網を張る今シーズン２回目の作業が先月末から始まりましたが、鹿島市や太良町の沖合では、赤潮の発生を受けて、多くの漁業者がのり網を張る作業を見合わせているということです。

佐賀県沖で行われている今シーズンののりの養殖では、摘み取りが始まったばかりの去年１１月にも赤潮が発生するなどして、先月までの生産量が、前のシーズンの同じ時期より１０％以上少なくなっていて、漁業者の間からは、影響が広がらないか心配する声が出ています。

【佐賀新聞2015年5月23日】

昨年県内漁獲量10年で最少、主力のノリ不振20％減

２０１４年の佐賀県内の海面漁業・養殖業の総生産量（概数値）は７万８３７３トンで、過去１０年間で最も少なかった。海面養殖業の主力であるノリが１３年季の冷凍網、１４年季の秋芽とも不振で、前年に比べて約２０％落ち込んだことが主な要因。海面漁業では、クラゲやナマコなどの漁獲量が伸び悩んだ。

農水省が海面漁業・養殖業生産統計としてまとめた。調査期間は１４年１～１２月。県内分は、九州農政局佐賀地域センターが有明海、玄界灘の漁協に水揚げ量などを聞き取りした。

有明海では二枚貝などの不漁傾向が続いており、サルボウやアゲマキなどの貝類の漁獲量は、過去１０年で９番目に少ない２０５０トンにとどまり、前年比で１５％減少した。エビ類も２１％減の９４３トン、カニ類は１７％減の３３トンだった。

一方、海面養殖業は、過去１０年間で最も少ない６万４５０４トンで、前年比２０％減。養殖業のほとんどを占めるノリ類が、秋芽ノリの不調などで２０％減の６万２６６２トンと落ち込んだのが影響した。

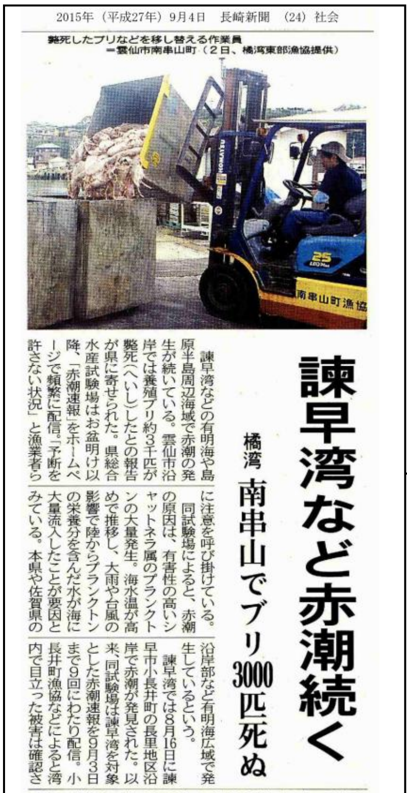
【毎日新聞2014年12月10日】

被害の大きさ口々に　開門、漁業者と国が意見交換

諫早湾干拓事業の開門調査を求める漁業者らと農林水産省の意見交換が９日、長崎市であった。

今季の有明海漁業について、漁業者らは「調整池の汚濁水が排水されて、ノリ網に泥のような粘着物が付着して、ノリが育たない」「アサリが１０月ごろ、ほとんど死んでしまった」など被害の大きさを口々に訴えた。弁護団の堀良一事務局長は「再生事業にこの１０年で農水省だけで４３０億円も使っているのに、成果がない」と指摘。４県協議についても「新しいものがあると思えない」と批判し、「（有明海再生には）開門以外にない」と強調した。

■赤潮被害を報じる新聞記事（左）



2015年（平成27年）9月4日　長崎新聞　（24）社会

斃死したブリなどを移し替える作業員
＝雲仙市南串山町（2日、橘湾東部漁協提供）

諫早湾など赤潮続く

橘湾　南串山でブリ3000匹死ぬ

諫早湾などの有明海や島原半島周辺海域で赤潮の発生が続いている。雲仙市沿岸では養殖ブリ約3千匹が斃死（へいし）したとの報告が県に寄せられた。県総合水産試験場はお盆明け以降、「赤潮速報」をホームページで頻繁に配信。「予断を許さない状況」と漁業者らに注意を呼び掛けている。

同試験場によると、赤潮の原因は、有害性の高いシャットネラ属のプランクトンの大量発生。海水温が高めで推移し、大雨や台風の影響で陸からプランクトンの栄養分を含んだ水が海に大量流入したことが要因とみている。本県や佐賀県の沿岸部など有明海広域で発生しているという。

諫早湾では8月16日に諫早市小長井町の長里地区沿岸で赤潮が発見された。以来、同試験場は諫早湾を対象とした赤潮速報を9月3日まで9回にわたり配信。小長井町漁協などによると湾内で目立った被害は確認されていないが、ボラなどの死骸が見つかっているという。

県水産振興課によると、赤潮は台風の影響で有明海から南側に回り込んだ可能性もあり、雲仙市南串山町沿岸の橘湾の養殖場では9月1日にブリ約3千匹が斃死しているのが見つかった。南島原市の口之津港付近の養殖場でも8月28、30、31日にブリ計約130匹の斃死を確認したという。

同試験場や同課は赤潮速報の小まめなチェックや、養殖魚の酸欠を防ぐため餌やりを一定期間控えることを呼び掛けている。（久保景吾）